
この世の果てに

kくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世の果てに

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

kくん

【あらすじ】

主人公の親友「谷本修也」が突然消えた。

修也がいたのは謎の世界「この世の果て」だった・・・

第一章「消えた親友」（前書き）

読んでもらえたら感謝です！

第一章「消えた親友」

第一章「消えた親友」

ある日、突然親友が消えた。
音も無く、何も残さず。

僕の名は「田中 翔太」どこにでもある
というかありすぎる超、普通な少年だ。
そしてそのその親友、「谷本 修也」が、
十月三日、午前七時二十五分にベッドの上から消えた。
そしてぼくは修也を探しに出かけた。

もしかしたらいつもいく身近なところにいるかもしない。
あいつらしい。いつも修也はすぐ家出する。

ドラ もんののび太みたいなものだ。

さて、翔太はまず、ゲームセンターに・・・
(いるわけないよな・・・)

翔太はまず別のところを探すこととした。

「とりあえずいつもの裏道・・・」

翔太は後からついてくる影に気づいて
いなかつた。

「おい修也・・・」

恥ずかしいので小声で言つてみた。

そばの電柱にははがれかけた

『谷本修也君を探しています！』

という紙がある。

(はああ・・・次はどこ探そ。)

小5の頭で思いつく場所を一通り探した後、

翔太はあることを思いついた。

あいつは何人かの友達と秘密基地を作つてその

（秘密基地が完成したら俺を招待するつて
やつぱりあそこしかない！）

翔太はそのとき修也と秘密基地を作っていた
上本に訊いた。

「上本！！」

「なんだあ？」

「修也の秘密基地つてどこにあるんだ？」

「えーとな・・・」

翔太が秋田にいるのに対し、彼は
最近引っ越して大阪にいた。

という訳でこの会話は電話だ。

彼は修也が行方不明だということを知らない。

「修也は行方不明なんだ！！」

「あつそう。それで秘密基地の場所は・・・
非常事態に落ち着いていられるのが彼の
特徴だ。この性格のせいで

よく危ない目にあつても抵抗せずに
ギヤアアアアー！－なことになるが・・・。

「秘密基地は『みつぎ団地』の

裏にあるゴミ捨て場の横の森を
越えたところにある工場みたいなところだ。」

「遠！－！」

「まあ頑張つてくれや。」

「おう！」

「「ガチャッ プーップーッ」

「よし行くか。」

翔太はもう一人の親友、

『鈴木 しげる』を誘い、秘密基地に
出かけた。

一時間後

「おいしげる！」

上本みたいに名字で呼ぶのはめずらしい。

「なんだあ？」

「あれじやないか？工場みたいなのん。」

「あ。そぞらしいな。」

一人は自転車を止め、工場に入つていった。

「暗いな。」

「ああ。」

「ブブンン　パチツ」

「！」

「なんだあ画面が光つてらあ

「電源あるぞ。」

「カチッ」

「ブブンン　ブブンン」

「おおー全部点いた！」

「今日はここまでにしどくか。」

「ああそうだな。」

一人は家に帰つていった。

第一章「消えた親友」（後書き）

これからどうなるのか!?次の章を期待してるかしないかで待つてくださいね

第一章「Jの社の黙示」（前書き）

わの第一二章一

第一章「この世の果て」

「んじゃ、行つてきます！」

「あんた最近よく外いくねえ。」

つとまあ家を出たわけだ。

でも・・・日常は続かなかつた。
今日もしげるを誘い工場に来た。

卷之三

一の山陽で遊ぶ一ノ瀬はしづかの山。

「クラスのやつを誘いたいな。」

ああ 一

が中間二四〇〇メートル。

そして浩一が来て・・・

「見てみろよこれ！でつかい装置みたいな・・・」
そう言つた瞬間だつた。視界が急に明るくなり
どんどん明るくなつて真っ白・・・

「ノーマン！」

僕は起された。「浩一に。

卷之三

「ハーバードの法廷」

声が出なかつた。

これは明らかに……おかしい。違う世界だった。
まるで……ダーリムの世界のようだ。

「起さうしげる！」

「ふあふうああ・・・・つ！－何だこれ！？」

「おかしいだろー？思つよなー。」

「みんな武器持つてん。」

「え？」

よく見てみると確かにそうだった。
みんな何かしらの武器を持っている。
小さい子もナイフを持っている。

「武器屋つてあるぜ！？ゲームかよーー？」

「「「ブウウウウ～」」

低い音が響いた。

「敵が来たぞおーー！」

「てきいーー！」

その時だ。

「翔太！」

「へ？」

振り向いた。

「誰？」

「俺だ修也だよー！」

『はあーー！』

三人が同時に突っ込んだ。

今修也は弓を肩に担ぎ、角笛を首に下げ、
鎧を身にまとっている。

「ここはいつたい何処なんだよ？」

「そこのはあさんが知ってるぜ。」

修也が指を差したほうに一人の老人がいた。

その老人はこっちにさつと振り向き・・・

「ここはこの世の果てさ。お前たちは抽選で当たったのさ。
何の抽選かって？・・・それはこのテストさ。

お前たちは本来もうすぐ何らかの形で死ぬんだ。だが・・・
抽選で当たつてこの生きる資格があるかどうかを確かめる
テストをされる。つまりこのテストで落ちれば失格で死ぬ。

合格すれば現実世界に戻り寿命が延びるのか。
生きるか死ぬか分からぬ生と死の境目、『「この世の果て』さー。』
この言葉は一生忘れられないだろう・・・。

第一章「Jの世の果て」（後書き）

いきなり話が進みましたねえ。

読んでくださっているあなたに相変わらず感謝です！

第三章「モンスター狩りの基本」（前書き）

「んにちは～

なんか連續で出しちゃつてますね。

やつてきた三人と再会した修也の四人で
この世の果てを「大・大・大冒険」

「ちなみに」のう、ijiではモンスターが出てくるから武器壁で買つといった感じがええぞ。」

は
し

意味不明だよ。大体なんだよいきなり武器使えって
・・・って俺は最初に思つたけどお前ら三人は違うみたいだな。
参考が言つた。

「ウルフ」

四人は武器屋へ向かつていつた。

十分後

「金なんて持つてねえよ。」

最初は素手でサニーモンスターを倒すんだよ。そいつらの首をあそこの『首屋』に売つたら結構な金になる。」

おへでー

三人がまた走り出した。修也が後から

おい待てよ！
と追いかける。

「ゲームのときは街の外なんかに行くとモンスターがわんさか・・・

卷之二

「あ、そうだよ。門のすぐ外にはザコモンスターいつぱいいるよ。」

ものす”にスピードで門に向かつて若者が走

門番がさつと門を開ける。門の外には大量の人間・・・いや・・・

小人
か
・
・
・

「「ジユシユブヲオオオオオオオオオオオオ」」

「すんげえおと。」

気がつくと門の外で数十匹小人が倒れている。

若者は「大量大量」と言いながらその死体を拾っている。

よく見るとその若者は銃みたいなものを持っている。

「火炎銃だよ。威力が大きい変わりに炎属性モンスターが倒せない。」

修也が説明した。

「すつかり詳しくなつてんな。」

「ああ。」

「俺もあの小人拾つてこよ。」

「ちょっと待て！」

「行こうとした浩」としげるを翔太が止めた。

「翔太の言つとおりだ。他人が狩つたモンスターを

同パーティ以外の者がとるのは大罪で終身刑になるんだぞ。」

「まじで・・・？」

「まじで。」

さてさて、そんなこんなで俺たちはモンスター狩りに出かけた。

「やり方はその時その時に説明するからまず行こうぜ。」

「ウォリヤア――――――！」

「ガツンッ」

「・・・

「いつてえええ！！かでえよ！」

「もちろんモンスターは硬い。やらかい部分を探すか

蹴るかだね。つて言つても小人は鎧着てるからやらかい部分

なんて基本的ない。小人の顔面はちつさすぎるから殴れない。

という訳で武器を持つていらない場合、小人は蹴ろう。または踏み

潰そう。」

「踏み潰すは無理だろこいつら速いから。」

「うまい人ならいけるよ。」

「「ガツン ブシャッ」」

四人はひたすら小人を倒しまくった。

夕方になつたころ、四人は広場に帰つてきていた。

金が入つた袋を持つて。

「武器屋行こうぜ！」

「おう！」

四人は武器屋に向かつて走つていった。

第二章「モンスター狩りの基本」（後書き）

普通にファンタジーになつてきましたね。
「次回は武器」や「この世の果ての法律」
が出てきます。

第四章「IJの主の戦い、武器庫と法律」（前編）

「IJの主の戦い」
今回も武器選び、
この世界の法律がメインです。

たかだ

突然悲鳴が響き渡った。

武器屋に向かっていた三人は

悲鳴のしたほうへ走った。

「今、仕事はまだ続いている」と、おおはつて行つた。

「漢毛」

僕もその場所から離れた。

しげると参やは無反応で・・・

といつている。

そこには死骸があった。死骸だった。

「ねまうよく」んなの見て平氣でいられるなあ。」

「よくある事だからね。」

『ええ！？』

これにはしげるも突っ込んだ。

「」の世界では意見が会わなかつたら殺し合い。

たまに怒りを表してその殺した

「覗美じき大罪じば。」

「……」も、懇親か。板垣

——がある。

いけない。これを法律とよんじやいけなかつたんだ。

「」でのマナーを破ると即死刑。それを見た誰かがすぐ殺す。」

「ええ！？じやあ俺たちもその法律・・・じやなくてマナーを破る

と即死刑なのか?」

「ああ。」

「ぼくは信じられなかつた。」

「その法律・・・教えてくれよ。」

「これを法律とよんじゃいけない!・!って言つてもあんま僕は詳しくないんだ。」

まあ知つてゐる限りのことは教えるけど・・・。まず

前にも言つたけど人の狩つたモンスターの首を横取りしたら即死刑。

次に銃係の武器に売つてゐる弾以外を入れると即死刑。

売つてゐる武器を改造しても即死刑。ちなみに自作武器も資格を持つてなかつたら即死刑。

さらにモンスターを飼つたら即死刑。最後に他国の者とモンスターの取引をしたら即死刑。

・・・とまあこんなもんかな。」

「他国つて・・・」の世界に国があるのか?」

「あるよ。」

「そうか。」

「まあそのことに関しては後々話していくよ。」

「よし。じゃあ武器屋行こ!」

「OK!」

四人は再び武器屋に向かつて走り出した。

『ポルトネスイア武器工房』

「着いたぞ。」

「さあどんなのにしようかな・・・」

今手元におある金は千八百Gだ。

浩一は真つ先に大剣を手に取つた。

「五百七十Gか。ちょっと高めだな。」

「まあいいんじゃない？」

「じゃあ俺はこれ！」

しげるは銃を手に取った。

「五百G。いい値段だ。」

最後に僕が残った。

「僕は槍だぜ。」

みんなに遅れをとるまいとなにも考えずに選んだ。まあ長くて重くて扱いづらい。

「やっぱ・・・短槍にしよう。」

「六百Gか。僕のが一番たけえな。」

「合計千六百七十G。残金百三十G。いいんじゃない？」

「これでOKだな。おし買おう。」

「「ププーチヤリンッ」

「機械で飼うんだな。店員いるの？」

「早速特訓だ！」

『ええ～・・・』

三人ともあまり乗り気じゃなかつたが修也だけは教える気満々だった。

「うん……

何かあるあるネタになってしまったぞ。
話の方向変え……なくていいかー（開き直った）

第五章「やらなければいけない」と（前書き）

楽しめたら楽しんでね。

第五章 「やらなければいけないこと」

「ハキヨン！」

「おわー！」

しげるが自分の撃つた銃の反動で吹つ飛ぶ。

「こんな重いのにこんな反動が…・・・」

「ドカツ」

浩一も大検の重さに四苦八苦していい。

だが僕は

「ヒュンツピシュツグサツ」

「翔太は短槍の使い方がうまいな。」

軽いからね！

小人がバタバタと到れていく。

「ポンジゲン！」

「ブザザアア！」

卷之三

性也。志也。生志才力。才力也。生一經。一

レジン法による腹腔内腫瘍に対する手術的治療

鳥居の力が弱まるが、

卷之三

ノルマニウムの研究 第二回

卷之三

その時

「「ブブウウウ

「敵が来る」などお !!十九粂戦闘準備 !!

「ヤバイッ 行かないと……！」

「ちょっと待てよ修也！」

「僕は十七班リーダーなんだ！皆を守らないと…！」

「俺たちも・・・」

「ダメだ！！あとでちゃんと試験があるからそこで・・・ああもう行くぞ！！話は後でだ！僕は夕方に昨日行った武器工房で待ってるからそこに行くんだ！じゃあまた後で！！」
そういうて修也は走つていった。

「あいつ兵士のリーダーなんだ・・・」

「なんかおしいこぶしした

見は行こう

おはようございます。おはようございます。おはようございます。

راینیاری

まわりは兵士だらけで修也の姿が見えなかつた。

「ええ、うーん、

「早く二二から抜ナシう！」

三人は兵士の群れを抜けて

臣士は慶一敬之の如く。

卷之三

〔二〕 〔三〕 〔四〕 〔五〕 〔六〕 〔七〕 〔八〕 〔九〕 〔十〕

修業は、いつに兵士となるやうに話を合つてゐる。

その笛がなつたとたん兵士が一気に砦の門から外にあふれ出し・・

! ! !

なんて喊声を上げている

そのとたん向こうの方に砂煙が上がつた。

何千とこう敵の兵隊だといふことはそこにいる誰もがわかつた。

そして砲の十九班兵士と敵兵士がぶつかり……

「「キキンカンカンチコドオオオオオオオン……」」

と凄い音が聞こえる。

「すげえ……修也……」

修也が見えた。敵の着ているものと味方の着ているものは違つ。その中に敵の中に思いつきり突っ込んでいつては修也が飛び切り目立つのだ。

その時後ろで声が聞こえた。

「こりやア驚いた。」

『はいい？』

三人が同時に後ろを振り向くと一人の老人が立つてゐた。その老人を見てしげるが……

「じつちゃん！…………？」

『じつちゃん！…………？』

「じつちゃん、じつちゃん、交通事故で死んだんじや……？」

「いや、わしも死ぬ寸前でここに来たんじやよ。お前はなぜここ？」

「つぶれた工場で遊んでたらでつかい機械が爆発して……」

「そうか……で……そちらの方々はここであつたのか？」

「いいや。一緒に爆発にまきこまれて……」

「そうかそうか。ここには婆さんがあるじやん。」

「うん。」

「あの婆さんは……ここにずっと昔から一歳も年をとつておらんのじや。と、誰かが言つておつたわい。」

「まじで……？」

「まじでじや。」

そして数時間はなした後、しげるのおじいさんはポツクリ死んでしまつた。

しげるはそれから夕方になつても宿から出でこなかつた。

「しょうがない。僕たちだけで修也のことに行くか。」
「そうだな翔太。」

第五章「やらなければいけない」と（後書き）

しげる君は悲しみから立ち直れるのか？

第六章「旅立ち」（前書き）

三人で修也のとこに行くはずが
しげるがあ～、つて感じの前半と
大冒険の始まり～つて感じの後半
があります。

第六章「旅立ち」

修也の言つていた武器工房に着いた三人。

そこにいたのは体重が何時もの半分以下に見える修也だった。

「どした修也？」

「いや・・・ちょっと深手を・・・」

修也が服をめぐると・・・

「うわ・・・キモ・・・」

「失礼だな。」

読者の予想通り修也は腹をザッククリ裂かれていた。

「そういえばしげるは？」

「しげるの爺さんがここにいてさつき死んだから落ち込んでるんだ。」

「そうか。」

「まずはしげるが先決だな。」

「ああ！」

「おうよー！」

しげるはアイスをなめていた。

「ええ！？」

三人が同時に突っ込んだ。

「なに三人同時にツツ「ミミ入れてんだよ。」

「じいさんは？」

「ああ大丈夫大丈夫 あいつ絶対天国行つて酒飲んでるから。」

「はは・・・（苦笑い）」

そこで修也が・・・

「ここで三人に話がある。」

「なんだ？」

「旅をしよう。」

『ええ！？』

「頭に他に人を三人集めて他国を探つて来いつて言われたんだ。」

「スペイか？」

「スペイだ。」

「そこまでは、なる。で、おれらと一緒につてか？」

「もちろん。」

一分で話し合いにケリがついた。

全員、行くと言つた。

予想もしない出来事が待つていると知らずに。

第六章「旅立ち」（後書き）

この章は短かつたですね。

第七章「気まぐれいなグレイ」（前書き）

気まぐれいな「グレイ（宇宙人）」
が現れます。SF？違います。ファンタジーです。

第七章「気まぐれいなグレイ

自分たちの国、正式には
自分たちが迷い込んだ国から
さほど離れていないある国。

「遅かったか……」の国はもう破滅している。「だな。」

最近周囲の国がどんどんやられているから
調べて来いと上の奴から指令が来た。
モンスターはこいらへんのはあんまり強くないから
モンスターにおいては心配はないと思つていた。
まあ小説ではよくあるパターン（？）だ。

「「チユドオーネン……」」

「いきなり銃かますなよしげる……」

「メンゴメンゴ。あそこにモンスターがいたもん。まあこいらへんのモンスターはみんな一発……？」

「「シユタタツ」」

「UFO！を信じるかい？」

なんて突つ走つてくるモンスター……

「グレイだ！ 気まぐれすきでここのでも行くからめったに見つからない奴！」

「やるか？」

「グレイは強すぎるー・やめーー。」

「ええ～・・・」

「UFOー君はいい考え方してるネー。」

「いちいち「UFOー！」つて言つてくるのがうざい……」

「UFOーだるー。」

「と言つて何処かへ「UFOー」で飛んでいった。
さて・・・

「しげるの銃の音よりもけえ！」

「あ！あれだ！」

「グレイが「ヒートー」に乗つて国を破壊してゐる！」

「つてかうちの国の同盟国だし。

「んじゃ俺らには関係ないんで行こか。」

「リジヤツ」

「H.F.O.! 逃がさないぞ! それにお前らは国の命令で俺を倒さない

といけないはずだ！」

「ざやあつああああつあつああつうーー」

そこでしげるが・・・

「狙うぞ！」

「「チュドオオオオオオオン！！」

「正義」たゞ遠くに弾に飛んでいた

セイで壁が・・・

「フジタラア！」

「大剣を…・・・おめでたあ！？」

卷之三

卷之二

卷之三

絶対本気を出してないのにやられたなんて言って飛んでいった。
気まぐれな奴である。

第七章「気まぐれいなグレイ」（後書き）

話の最後らへんで
決着がつく・・・
と良いですね！

第八章「この世の果ての五大陸・砂の大陸」（前書き）

砂の大陸です。

第八章「この世の果ての五大陸・砂の大陸」

「あつつく！」

「なにこゝ、修也説明しろよ！」

「僕もここ来たの初めてなんだよ！」

だいたい僕がこの世の果てにきてから
二年しかたつてねえんだよ！」

「あつそう。」

「うせコイツ・・・」

今は四人で砂の大陸に来ている。

そして「ライル国」を目指しているのだ。
その国情報を探るために。

この砂の大陸はこの世の果ての五大陸と呼ばれる
大陸のうちの一つだ。あつい。特徴はこれだけ。

「あつあそこに車が！乗せてもらおう。」

四人は車のほうへ走つて行つた。

「乗せてクンロ。」

「・・・」

「おい！乗せてくれよ！」

「・・・」

「おい！・・・！」

「こいつ・・・」

浩一が車をけつた瞬間その反動で

向こうを向いていた運転手の顔がこっちを向いた。
「しんてる！？」

その運転手は死んでいた。

「また死人が出たぞ！」

向こうから声がした。

「何だここは・・・？」

その時一人の若者が向こうのほうからかけてきて

「おまえら！ここにいたらモンスターの毒に侵されるぞ！」

元気な奴が急に倒れて死んでいく。はやくここから辺から離れる！

「へえ！そのモンスター倒せば金くれるか？」

「おい翔太！」

若者は

「おういいとも！いくらでもくれてやらあ！」

だがやめとけ！あいつ狩りに行って何人死んだかわからんねえ！」

「そうか。じゃあ行こうか！」

「オイ！まで！」

「ん？」

「モンスターは東の洞窟にいる。」

「情報提供ご苦労さん。」

四人は東の洞窟へ向かつた。

「・・・あいつらそんな腕に自信あんのかな？」

若者はその姿を不思議そうに見送った。

第八章「この世の果ての五大陸・砂の大陸」（後書き）

次回に期待。

第九章「東の洞窟」（前書き）

東の洞窟にはなにが・・・
この物語読み手視点と
翔太視点が多いな。

第九章 「東の洞窟」

四人は走っている。

今は東の洞窟を日指しているところだ。

『ううん、お前が何をやるかわからんた？』

風で寝入る

風で寝込んでて、母さんにご飯を持ってきても泣いたんだ
で、頭がク～ラクラしてきて味噌汁を顔に浴びて
ひっくり返つたらそこは窓の外で・・・

普通なら死ぬ高さじゃないんだよ。そのまま意識とんどこに来た。」

二メテイたな

あこたふんここた東の洞窟！

同窓の場所とその内部を書

風に乗った。

おおおと想が氣樂に詠う。

そして四人は暗闇へ入っていった

「同人誌」

子供のようなモンスターが雄叫びを上げながら

「オザワモ・・・ニセ

その時
・
・
・

浩一の大検から靈氣のよくなものが出て空氣を淨化していく。

參照書三十二

他の三人の武器からも出た。

「リリ」まで出来れば立派な兵士だよ。」

! ! !

モンスターが起こっている様子だ。

「ヲゲツ」

モンスターの小さな足が・・・伸びた！

そのまま翔太の顔に・・・

『説小治政』

足は翔太を吹っ飛ばした。

はんそう

「ヨンデブツ！」

叫ぼうとした赤ん坊の顔に短槍が刺さる。

۱۰۷

しするが流で倉をまたいで翔太を度す。

「ナニシ・・・・・」

モンスターが歯を喰ひして炎を吐いた

卷之三

守護霊が全員を守つてゐる。

そして

卷之三

たつ
て
・
・
・

一チラシ・・・・・他・・・・

中華書局影印
宋史卷一百一十一

「お嬢様よ！お氣を淨化してくれ！」

・・・っというわけでこの村は元通りになつた。

第九章「東の洞窟」（後書き）

次はいよいよ砂の大陸の中のリモール国をレッツスパイ！

第十章「精霊の使い手」（前書き）

久しぶりの更新。

久しぶりの翔太目線。

第十章「精霊の使い手」

「お~い。」

「いくら武器に呼びかけてもだめだろ。」

「いまは「ライル国」を目指し旅中。あの時以来守護霊は姿を見せない。」

「おつかしいな~。」

「なにがだ?」

「なんとなく僕の短槍が前より重くなってるような・・・」

「俺もこの大剣がまえより重く・・・ぐぐぐ・・・」

「浩二の大剣は前から重いな。」

僕らは見た。

その時、前の方に凄い光が・・・

「「一日後」」

「ついたー!」

「あの光なんだつたんだろ。」

「いいじょんいいじょんそんなこと。」

浩二が武器屋へ突っ走る。

「俺コイツ買おう。」

「その大剣高いって・・・」

「一応足りるよ。」

「じゃ決まり。」

「その大検を買つたとたん・・・」

「ふわわああ・・・」

精霊が古い大剣から新しいものへとのりつづつた。

「せ・・・精霊の使い手だ・・・!」

店の店主が叫ぶ。

「精靈の使い手だつてよ！」

「こいよ。天才たちのお出ました。」

「「ザワザワ・・・」」

「そんなに珍しいのか？」

しげるも銃を新しく買い、精靈が出てくる。

僕と修也も同じだつた。

「そんなぼろつちい槍でいいのかね？」

「はい。」

勇者氣分だ。

「そんなめずらしいのか？」

「うん。どんな^{タイコク}大国でも二、三人・・・やばつ！」

修也が僕らを引っ張る。

「僕らスパイじゃないか！」

予想通り兵士が来て・・・

「捕まえろ！！」

「気をつける！相手は精靈の使い手だ！」

こんな状況でもなぜかうれしい。

第十章 「精靈の使い手」（後書き）

あらへやうひなたひるひりあざひ・・・

第十一章「少年」（前書き）

新しい
が
・
・
・

第十一章「少年」

「まてい！」
「やだね！！」
兵士達が次々と追つてくる。
「あつあの光つてここいら辺だよな。」
「んなこといつてるばあいか！？」
「あれ？兵士が追つてこないぞ？」
見ると兵士のそばで少年が横たわっている。
「こいつはだれだ？」
「知つているわけなかろつ。」
「おいつ！こんなやつよりスパイの捕獲が先決だ！」
「ひどいやつら。」
また追いかけっこが始まった。
「よつこらしょ。」^{ユウ}
ヒターンして少年を担ぐ。
「いけるか浩一？」
「大剣の二分の一ぐらいしかないぜ！」
「そんな大剣と少年を一緒に担いでるだろうが！」
そんなことをしている間にすぐ兵士が僕らに接近。
「ふふふつ情けは自分のためならずだぞ・・・」
「当たり前だひげ親父！どうせ安い給料でこき使われてんだろ！」「な・・・！」
兵士が血の抜けた顔でへなへなと座り込む。
「あたつてたの！？」
「何座つてんだけはやく追いかけろ！」
「無理です・・・私には・・・」
「そうとうまいまいってんな！」
「もうここまでしつこかつたら殺しちゃうしかないだらあの兵士ら。

しげるはたまにその性格とは違う発言をする。

まあ僕もその場で短槍構えたけど・・・

「「ズドウ！！」」

しげるのぶつ放しで早くも兵士が数人リタイア。

「もうこんな給料でこんなハードな仕事やつてけねえ・・・（泣）

「どんだけだよ！しかも言葉にネット用語入れたあー？」

三分後・・・

「はやくも全員リタイア・・・」

兵士達は「」と・・・

「もう金が・・・体力が・・・人生が・・・」

とこんな事を言つていて

「いろんな意味でかわいそうな人たち・・・」
すると浩一の背中にいる少年が・・・

「うん。」

「起きてたあ！！」

「何で僕ここにいるの？」

「もしかして・・・」

「もしかしてのもしかして・・・」

「きみ、日本人？」

少年はしばらく黙り込んで・・・

「うん。」

「やつぱりかあああ！・・・！」

「こいつ、どうしよ？・・・」

「まず、おいていくわけにはいかないから。」

「だよね。よし。仲間にしよう。」

「ここどこ？」

「本来死ぬ人が運よかつたらこれると」。ここで何かしたら日本に

戻れるそうなんだ。」

「本来死ぬ人が運よかつたらこれるといつて・・・
「でもこんな簡単に仲間にしちゃつていいのん?」
「いんじやない?」

第十一章「少年」（後書き）

の正体は「仲間」でした。

第十一章「これ漬入」（前書き）

・・・（何もこうじが思いつかない）

第十一章「いざ潜入」

「さて……」

いきなり兵士達に見つかって逃げながら頑張つて、
ほんとに頑張つて王城までたどり着いたのだ。

「この三日何も食つてねえ……」

浩一が言う。

「僕も……」

正輝がいう。

彼は三日前にこの世界にやってきて
僕らの仲間になつたのだ。

「この任務終わつたら美味そうなモンスターを一つ……」

「目が怖い目が怖い……」

そう言いながら修也が縄の先に金属のフックがついた物を取り出す。

「忍者かよ……」

「同じようなもんだ。」

そして城の壁のいたるところにかぎ縄を引っ掛け、のぼつていく。

「・・・つじ・・・地獄だあ……」

正輝が下を見て言う。

「怖がつたら負けだ。つじやあああ……」

「しげる……」

しげるが落ちていく。

「何のためにでつかい布買つたんだよ……？」

「パラシュー卜は素人には扱えません。」

その時、武器の中から精霊という種類にに分類される

「武器の守護霊」がしげるの銃から出でくる。

「ぶわあああ」

すごい力で上に飛んでいく。

「よし！俺らも！」

浩一が「精靈よ！」と叫ぶと予想通り浩一の大剣から

「武器の守護靈」が出てきてあつという間に城のてっぺんだ。

のこり三人残つた僕達も・・・あれ？正輝の武器からも・・・

「たぶん地球人は全員精靈を扱えるんだ！」

さあ・・・

「「ギュウウン！」「

き・・・気持ちい！こんな気分を一番に味わいやがつて、しげる
め・・・

「さ、早速中を・・・うおつと！」

正輝はこの数秒間兵士から丸見えのところにいた。
氣ずかれないよかつたあ。

「中に入るぞ・・・」

浩一の合図で全員が窓から忍び込む。

そこにいたのは、数百人の兵士だった。

第十一章「いざ潜入」（後書き）

絶体絶命！こいつらほんとにスパイか！？
まあなれない仕事だしあともとただの民間人だしね。

第十三章「UFO再び」（前書き）

UFO再び・・・
予想は大体つく。

第十二章「UFOの再び」

僕らが飛び込んだのは兵士たちのいる大広間？みたいな所。僕らは反射的に近くの壁の陰に隠れた。

「ちょ狭いって……あつあ

「しつ！」

そういうつて僕らを壁の陰から引っ張り出したのは「うつ」兵士だった。

「かわいい子供だから今回だけは許してやらあ！」

自分では小声で行つてゐつもりだろうがその大声で周りの兵士もこつちをふりむく。

しかしその時には僕らはあの兵士に窓の外に投げてもうつたので・・・

・・・窓の外・・・窓の外・・・つて・・・

「ぎやあああ落ちるうーー！」

「守護靈に頼め。」

「「ブワアアアアアア」」

僕たちは良かつたといつ。しかしそれは破壊の始まりだった。

「あそこに誰かいるぞ！」

「子供が飛んでいる！」

「精霊の使い手だ！」

「まさかそんなはず・・・！・・・」

そう町中、いや國中の人々に見られている。

やばい！と思つときはそれはもつとやばいのがくる予兆だ。
「ウフオオ

「UFO！」

「ん？この声どつかで・・・つてぎやああーー！」

「久しぶりでUFO！」

「ヒサシブリデユウフオオ？」

「正輝！あいつからはやく逃げるんだ！」

「「ビュビュズドオオオオオオオオオン！」

「うー？」

「わかつたらはよ逃げろ！」

僕たちは守護霊の力を借りて大急ぎで

自分たちがもと来た国へと帰つた。

ちなみに後から知ったがこの自分たちが

「ライル国は終わりだな。」

11

僕らはそう思つていた。「あの人」に出会うまでは。

グレイつよいな。

第十四章 “伝説の人と「テンセツノヒト」と「ソノフイト」（前書き）

あの四人とはまた別の話です。

第十四章 “伝説の人と「デンセツノヒト」と「ソノワイト」”

「ぱぱー！お話してー！」

そういうたのは小さな少女。

「うーん・・・今日は話が思いつかないから本を読んであげよう。

「やつたあー！」

そういうつて父が娘に見せた本は・・・

「デンセツノヒト？」

「すぐ面白いでぞ。」

・・

むかしむかし、あるところに人が倒れていきました。

しかしその時その国の人は敵の国が攻めてきてその人にかまつて
いる余裕はありません。

なんたつて国の砦のつりのひとつがもう攻め落とされたんですか
らね。

でもある茶髪のおじさんがその人を抱き起こし自分の砦にある家
で三日三晩眠らずに看病しました。

そしてそのおじさんは戦いをサボった罪で国の王様に処刑されま
した。

しかしその看病された人は決してその王様を怨まずただただその
茶髪のおじさんに感謝しました。

その様子を見て王様は悪いことをしたと思いその人に土地を^{カネ}与
ました。

でもその人はその土地を売つてその金すべてを貧しい人々に^{カネ}与
ました。

その姿に感動した王様はその人に金を与えました。そして・・・

「お前のよつな善人は見たことがない。」の金で世界を回つて困っている人を助けるのだ。」

といいました。

するとその人は「私の願いはこの世のすべての平和。これは願いであつて現実ではない。

私はこの世界を回り平和を与え、時が来たら祖国へ帰る。」

とだけ言いその金を全て貧しい人々に与えました。王様はこの人が言つていることがよくわかりませんでしたが、とにかく感動して言いました。

「感動とはそのものの言つている意味がわからなくてもその心が表れると姿を現す。」

結局この人は王様から与えられた金額の三倍を働いて稼ぎ、その半分をまた貧しい人々に分け与え、残りをもつて世界平和を目指し旅立つたのでした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いい話だつたね。」

「お前にこの内容がわかつたのか?」

「ナイヨウつて何?」

「はははー! そうか内容も知らないか。」

「ブンブンー!」

「そんなこと生で言つてゐやつは始めてみたー!」

「ナマ?」

「はははー!」

「違うもんー! ちやんと『ソーテンテツノフイ』のナヒヨウ分かつてゐもん

!」

「はははー!」

「ブンブンー!」

第十四章 “伝説の人と「テンセツノヒト」と「テンセツノフイット」（後書き）

「テンセツノフイット」と書いている女の子の名前は「ナミナ」です。ちゃんと後の話に出てきますよ。あと「テンセツノフイット」ですね。

第十五章「対策」（前書き）

もちろんHIO野郎の対策です。

第十五章「対策」

しばらくすると正輝が顔を上げる。

「伝説の人か・・・ノンフィクションなんて文書をこの世界で目にするととはね・・・」

「でもおかしいよな。戦争中なのに世界中の人に助けに行かせたつてどんだけお人好しな王様だよ。」

「まそこはものすごくお人好しな王様だつたと思って。」

ただいまメゾルド王城待機室。王様に会うために待つ僕たちスペイ五人組（うち一人は非正式）は暇つぶしに絵本を読んでいた。

そこで扉が開き・・・

「来い！王がお呼びだ！」

兵士が入ってくる。

「こんな奴一瞬でひねり潰せそうなのに・・・」

浩二がつぶやく。

「早く来い！」

王室につく。

「お前たち。ずいぶんと他国の人間に顔を知られているじゃないか。」

「いいえ。」

しげるが言つと

『嘘付けええ！』

なぜか仲間四人も王様と同時に突つ込む。

「スペイはむいていないな。まあいい。報告を聞かしてもらおう。」

「ライル国はグレイにより壊滅しました。」

「しつている。その国の逃亡者捕まえたらお前らが思いつきり顔見られてるって言うからな。びっくりだ。」

「王様。心配無用でその国はすでに壊滅してるよ。」

「正輝つ何口出ししてんだ！」

「そのとおりだな・・・」

「まずはグレイ対策としてあの男を呼ぶか・・・」

「誰つすか？」

「グレイの本気を見た者だ。」

「そんな奴いんの！？」

「その男は「伝説の人」と呼ばれている。」

「まさかその男って・・・！？」

「任務だ。その男を探せ！」

僕らは言われたとおりに任務を実行する。

これが後のさらなる大冒険につながっていくとは知らず・・・

そう。その時は何も知らなかつたから・・・

第十五章「対策」（後書き）

Q: NZ? でビームで生まれた表現なんだろ? う?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583u/>

この世の果てに

2011年10月18日21時54分発行